

オーラルコミュニケーションAの教科書分析

—非言語コミュニケーションの観点から—

広島大学大学院 井上 英俊

1. はじめに

人、物の交流がますます盛んになりつつある今日、我々は異文化の背景を持った人々と日常的にコミュニケーションをする機会が多くなってきている。その際に情報の伝達手段として使用されるのはいうまでもなく言葉である。

しかし、コミュニケーションの際我々が使用する情報の伝達手段は実は言葉だけではない。言葉以外の手段によるコミュニケーション、つまり非言語コミュニケーション (Nonverbal Communication = NVC と省略) も行われる。Birdwhistell (1970) によると我々のコミュニケーションはその65%が NVC によってなされている (言語35%) とされ、また Mehrabian (1968, 1972) においては93%が NVC (38%が音声的な要素, 55%が非音声的な要素) によるとされており、言語によるコミュニケーションはわずか7%である、と述べられている。

従って我々は、コミュニケーションを教授、研究する際に NVC の占める割合がいかに大きいかということ十分に認識しておく必要がある。確かに日本の英語教育においては第一に言語によるコミュニケーション能力の育成を目指すべきである。しかし、NVC は各文化において異なるものも多数見受けられるので教授、学習上軽視されるべきではない分野である (eg. Chastain, 1988; Hurley, 1992; Kellerman, 1992; Neu, 1990)。

そこで本研究において、NVC が現行の教科書において実際どのように取り扱われているのかを考察し、そこから今後の英語教育への示唆を述べてみたい。

2. 非言語コミュニケーション (NVC)

2.1. NVC の概要

まずコミュニケーションとは人と人との間の情報の相互交換であるとし、言葉によるコミュニケーションを言語コミュニケーションとすると、言葉によらないコミュニケーション全般が非言語コミュニケーションとなる¹⁾。つまり言語面と非言語面が合わさってコミュニケーションは成立するわけであり、非言語面を抜きにしてはコミュニケーションが成り立たないことになる。

それでは、NVC にはどのような要素が含まれるのであろうか。実際の人間の行動は複雑であり、それぞれの学問分野で扱われていることが同時に起こりうる。しかしここでは具体的な分析を進める必要上それぞれを区別して考察することにする。さらに、言葉以外のコミュニケーションを分析対象とするとあまりにも膨大な要素が含まれてしまうので、本研究では以下の留意点を付け加えることにする。すなわち、(a) 異文化間コミュニケーションを想定し、文化間において相違のあるもの、(b) 対人間コミュニケーションを想定するもの、(c) 相違が原因

でコミュニケーションに支障をきたすもの、そして(d)英語教育の現場で実際に指導の効果が期待できるもの、の以上4項目を条件として日本の英語教育において取り上げるべきNVCを選択すると以下の表のようになる。

表 1. 非言語コミュニケーションの分類²⁾

非言語 コミュニ ケーション (Nonverbal Communica- tion)	音声的要素 (a) 音調学：音声的特質を扱う分野
	非音声的要素 (b) 近接学：空間利用の仕方を扱う分野 (c) 視線接触学：視線の使い方を扱う分野 (d) 接触学：実際に身体の接触の仕方を扱う分野 (e) 動作学：身体の動き方を扱う分野 (f) 表情研究：顔の表情から感情の表出方法を扱う分

2.2. NVC の必要性

ここでNVCの持つコミュニケーション上の機能的な重要性について考察してみよう。Leathers (1992)によるとNVCの機能的な重要性は以下の6つに要約できる、としている。

- (a) Nonverbal communication is usually the dominant force in the exchange in the inter-personal context.
- (b) Feelings and emotions are exchanged more accurately by nonverbal than by verbal means.
- (c) Meanings exchanged nonverbally are relatively free of deception and distortion.
- (d) Nonverbal cues serve a metacommunicative function that is indispensable in attaining high-quality communication.
- (e) Nonverbal cues represent a much more efficient means of communicating than verbal cues.
- (f) Nonverbal communication is a particularly suitable vehicle for using suggestion.

さらに、以上の機能的な重要性に加えて、現行の学習指導要領に掲げられている英語教育の目標と照らし合わせながら、英語教育においてNVCを教授、または研究する必要性を以下の4点において探っていく。

(a) 方略的能力育成の観点から：「外国語で表現する能力を養う」という目標から、communicative competenceの育成、その構成要素の一つである方略的能力の育成を目指さなければならない。方略的能力の構成要素においてNVCが占める割合も見過ごすことはできず、その果たす役割も重要である。特に日本のように外国語(第2言語)として英語を学ぶ場合には、NVCを教授することは避けられない。

(b) 文化教授の観点から：さらには「文化に対する関心を高め、国際理解を深める」のが英語教育の大きな目標の一つである。そこで各文化に深く根ざしているNVCを教授することは文化を教授することにおいて不可欠な要素の一つになってくる。つまり、NVCを教授することを通じて効果的なコミュニケーションの方法を学習させるだけでなく、その対象文化の価値観や信念を合わせて教授することが可能なため効率的であり、しかも学習者の記憶に残りやすいであろう。

(c) 「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の評価の観点から：そして「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」という目標から、現在様々な評価法が提

示されてきている³⁾。しかも、それぞれの評価法の構成要素にはほとんどと言って差し支えないほど NVC に関する項目が設定されている。学校教育における評価は、ある期間中に教授されたものに対する評価でなければならないので、評価基準として設定されている以上必ず NVC は教授されなければならないであろう。

(d) 動機付けの観点から：授業／講義を問わず座ったまま教育を受けることが多い日本においては、教授、学習活動がとかくマンネリに陥りやすく、学習者は英語学習に対する興味を失いがちである。私の体験から言っても、教授者にせよ、学習者にせよ、教材等で扱われている学習事項を実際に具体的に行ってみることは大いに学習者の関心を引きつけるものである。その典型として NVC を挙げることができるのではないであろうか。

3. オーラルコミュニケーションAの教科書分析

3.1. 分析対象

それでは、現行の教科書では NVC はどのように取り扱われているのであろうか。ひとえに教科書といっても実に多種多様であるので、今回はコミュニケーション用の教科書からその性格上オーラルコミュニケーションAを取り上げることにする⁴⁾。調査観点としては前述の学問分野別分類を基準として以下の7項目に関して分析した⁵⁾。

- 題材、主題に関して
- 挿し絵(自己紹介)に関して
- 挿し絵(その他)に関して
- エクササイズ(音声的)に関して
- エクササイズ(非音声的)に関して
- 欄外、付録(音声的)に関して
- 欄外、付録(非音声的)に関して

3.2. 分析結果と考察

調査結果を表にすると以下ようになる。

表 2. 教科書中の NVC

	NA	MS	IN	AE	SE	EV	HT	EX	LH	LA	SA	ES	NS	EC	BL	LE	SW	Total
題材・主題									1		1							2
挿し絵 自己紹介				1			1			1			1	3				7
挿し絵 その他		2				1	1	1	1						5		1	12
エクササイズ 音声的											3							3
エクササイズ 非音声的									3									3
欄外・付録 音声的	7			2		1	7		5				1	1			8	32
欄外・付録 非音声的		④		①		3		1	①	②		②	3					⑩+7

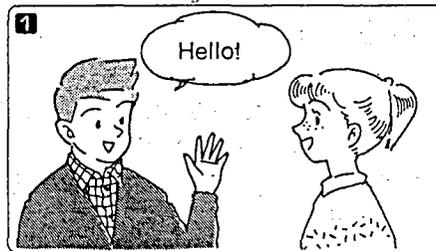
※ 数字は該当個所数。
なお ○ は見開き、各 Lesson 間の挿入ページ(数字はページ単位)。

(a) 題材、主題中の NVC に関して：17冊中わずか1社の教科書においてのみ1課だけ見受けられた。言語機能中心に制作された教科書もあろうが、教科書の制作趣旨によっては NVC を題材、主題として盛り込んでいくことが可能であろうと思われる。

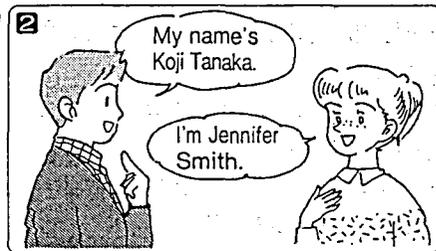
(b) 挿し絵中の NVC に関して：NVC を表す挿し絵が特に自己紹介の場面において多く用いられていた。しかし、自己紹介以外の場面では、上述のように題材、主題に取り上げられていないことにより、NVC に関しては総数も少なく、さらに場面を的確にとらえているとは言い難く、意図がはっきりと感じられない挿し絵も見受けられた。

< 自己紹介の場面における NVC >

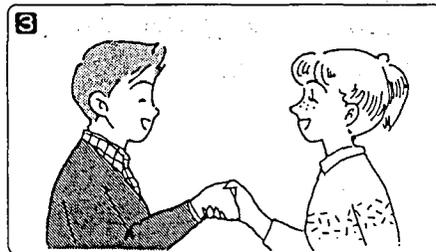
Scenes & Key Words



hello, how, fine, thank



introduce, name, eleventh, grade, Jennifer Smith, Jennie [dʒɛni]



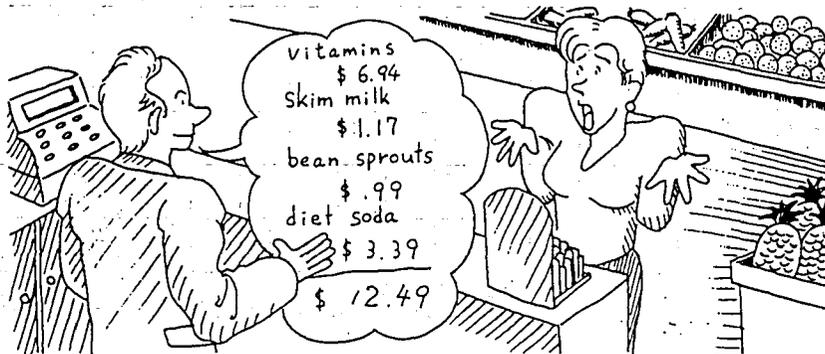
glad, meet, where, from



the United States, raise(d) [reiz(d)], Los Angeles [lə(:)s ændʒələs], California

『Active English Communication A』 p4

< その他の場面における NVC >



『Evergreen Communication A』 p44

(c) エクササイズ中の NVC に関して：音声的 NVC に関しては、今回はイントネーションを取り扱ったわけであるが、わずか 1 社において 3 題のみが見受けられた。同様のことが非音声的 NVC にも当てはまる（1 社、3 題のみ）。量的観点から言うと、コミュニケーション用の教科書であるにも関わらず、わずかこれだけしか取り上げられていないのは問題があると言わねばならない。どの教科書においても各 Lesson には必ず dialog があるはずであるから、特に音声的エクササイズに関しては dialog に基づいたエクササイズが設けられるべきであろう。

さらに質的観点から言うと、教科書のエクササイズに取り上げられていた NVC でさえ、題材、挿し絵、付録等との関連性がみられない場合が多かった。エクササイズは本来各 Lesson のターゲットを定着、発展できるようなものであるべきなので、NVC も例外的に取り扱うべきではないように思われる。

< 音声的 NVC に関するエクササイズ >

---- 英語をよく聞いて、イントネーションに注意して言ってみよう。

- (1) What do you do on New Year's Day?
 (2) There're herring eggs, beans and "ozoni" or soup with rice cakes.

DRILL

- (1) Where do you go on Christmas Eve?
 (2) I love tennis, baseball and "sumo" or Japanese wrestling.

『Sailing Oral Communication A』 p83

< 非音声的 NVC に関するエクササイズ >

2. 次のジェスチャーが Tom の国ではどんな意味をもっているのか、Tom に尋ねなさい。また、答えを聞いて () にその意味を下から選んで書き入れなさい。

(例) You : What do you mean by this gesture?



Tom : This gesture means ...

1.



()

- a. no good
b. moncy

2.



()

- c. good luck
d. accusing

3.



()

『Lighthouse Conversation』 p18

(d) 欄外、付録中の NVC に関して：特にオーラル・コミュニケーションの教科書であるという性格上、NVC に関しては欄外、付録中に盛り込んでいくのが一番妥当のように思われる。その点からいっても今回の調査では数的には一番多く取り上げられているという結果にはなつた。しかし、同時に教科書間のばらつきが一番目立った項目でもあった。教科書制作の意図はともかくとして NVC をもっと取り上げる余地は十分あるように思われる。

音声的 NVC に関する要素においては、定期的にある程度の量が盛り込まれているものが 3 社見受けられた。これらはオーラルコミュニケーション用の教科書という性格上妥当な処置のように思われる。つまり、定期的に音声的 NVC に触れさせることにより、繰り返し練習する機会が与えられ、それに伴う意識化も可能である、と思われるので音声面での指導上有効であ

るように思われる。さらに、エクササイズと同様、各 Lesson の dialog で取り上げられたものに関連するものを取り上げるなら、より定着が促進されるのではないであろうか。

非音声的 NVC に関する要素においては、特に見開き、各 Lesson 間の挿入ページとして取り上げられる割合が高かった。絵と説明を合わせて提示している場合が多く、非音声的 NVC の性格上有効な提示方法であると思われる。ただこれらの提示方法では、各 Lesson で題材、主題として取り上げられていないことにより、実際に生徒に導入されているのかどうか、という問題が残る。

< 欄外、付録中の音声的 NVC >

PHONETICS

声の高低の変化のうち、話し手の気持ちや態度を表すものをイントネーションと言います。話が「完結」したときや「断定」するときには「下降調」、 「未完結」のときや「判断を保留」するときには「上昇調」になります。声の高低の変化に注意して聞きましょう。次に発音しましょう。

- (1) This is five DOLLars ↓. (平叙文：断定的に情報を伝える)
- (2) Is this for SALE ↑ ? (yes / no 疑問文：判断を保留して、相手の回答を求める)

『Speak to the World Oral Communication A』 p52

< 欄外、付録中の非音声的 NVC >

Cultural Tips



日本では話を聞くときによくうなずきますが、欧米では相手の意見に対する賛成を表すことになるので、不用意にうなずかないようにしましょう。

『Hello, There! Oral Communication A』 p15

4. 今後の課題

以上、日本の英語教育で取り上げるべき NVC にはどのような要素があり、どのような重要性があるのか、という問題を英語教育の目標とからませて概観した。さらに、実際に教科書中で NVC はどのように取り扱われているのか、という現状をオーラルコミュニケーション A の教科書調査を通じて分析した。今後の課題としては、本研究で明らかになった問題点の改善に加え、(1) 特に日本人特有の NVC と、それに伴う異文化間コミュニケーションの際の communication breakdown の発生の仕方の検証並びに集積、(2) 教科書において特に音声面における NVC の体系だった導入方法の検討、そして (3) 実際の教育現場における実践の手法の検討、の以上 3 点をさらに研究していく必要があると思われる。

【 註 】

- 1) NVC の定義には大きく分けて 2 種類が考えられる。(Mehrabian (1972) より引用)
- (a) In its narrow and more accurate sense, nonverbal behavior refers to actions as distinct from speech. It thus includes facial expressions, hand and arm gestures, postures, positions, and various movements of the body or the legs and feet (Birdwhistell, 1952, 1970; Efron, 1941; Ekman and Friesen, 1969b; Exline and Winters, 1965; Hall, 1959, 1963, 1966; Kendon, 1967a; Mehrabian, 1971c, 1972; Schefflen, 1964, 1965, 1966; Sommer, 1969).
- (b) In the broader sense in which the concept has been used traditionally, however, the term nonverbal behavior is a misnomer, for a variety of subtle aspects of speech frequently have been included in discussions of nonverbal phenomena. These include paralinguistic or vocal phenomena, such as fundamental frequency range and intensity range, speech errors or pauses, speech rate, and speech duration (for example, Boomer, 1963; Crystal and Quirk, 1964; Davitz, 1964; Dittmann and Llewellyn, 1969; Duncan, 1969; Goldman-Eisler, 1968; Huttar, 1967; Mahl and Schulze, 1964; Matarazzo, Wiens, and Saslow, 1965; Mehrabian, 1965; Pittenger and Smith, 1957; Rubenstein and Cameron, 1968; Starkweather, 1964; Trager, 1958).
- 2) 橋本・石井 (1993) を参考に分類した。なお、今回はオーラルコミュニケーション A の教科書分析ということで、指導の効果が期待できるものという留意点より時間学、対物学は排除している。
- 3) 一例として、平野 (1993) によると、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の評価に関して、「特に重要であり、かつ日本人学習者が不得意とするもの」という理由から以下の 4 点を挙げている。
- (1) 長い沈黙をおかない。
 (2) (以下のように) コミュニケーションを持続しようとする。
 ① コミュニケーションに詰まったとき、別の言葉で言い換えようとする。
 ② 聞き手に援助を求めて適切な語句を引き出そうとする。
 ③ 新しい情報を追加しようとする。
 ④ 自分の理解が正しいかどうか確認しようとする。
 ⑤ 相手の言葉が理解できないとき、説明を求めたり、聞き返そうとする。
 ⑥ 相づちを打とうとする。
 ⑦ 非言語手段 (ジェスチャー、顔の表情等) を効果的に使用したり、理解しようとする。
 (3) 自分から進んで発言 (問いかけ、応答) しようとする。
 (4) 相手と視線を合わせようとする。
- 4) 本研究で使用した現行の高等学校用オーラルコミュニケーション A の教科書
- 荒木一雄 (他) . 1995. 『The New Age Dialog』 研究社. [NA]
 安藤昭一 (他) . 1995. 『Mainstream Oral Communication A』 増進堂. [MS]
 石井敏 (他) . 1995. 『Oral Communication Course A Interact』 桐原書店. [IN]
 小川邦彦 (他) . 1995. 『Active English Communication A』 一橋出版. [AE]
 北出亮 (他) . 1995. 『Select Oral Communication A』 三省堂. [SE]
 佐々木昭 (他) . 1995. 『Evergreen Communication A』 第一学習社. [EV]
 神保尚武 (他) . 1995. 『Hello, There! Oral Communication A』 東京書籍. [HT]
 鈴木進 (他) . 1994. 『Expressways Oral Communication A』 開隆堂. [EX]
 竹林滋 (他) . 1995. 『Lighthouse Conversation』 研究社. [LC]
 田辺洋二 (他) . 1994. 『Laurel Oral Communication A』 三省堂. [LA]
 豊田昌倫 (他) . 1994. 『Sailing Oral Communication A』 新興出版啓林館. [SA]
 羽澄英治 (他) . 1995. 『English Street Oral Communication A』 第一学習社. [ES]
 花本金吾 (他) . 1995. 『New Start English Communication A』 旺文社. [NS]
 山本証 (他) . 1995. 『Echo English Course Oral Communication A』 三友社. [EC]
 吉田研作 (他) . 1995. 『Birdland Oral Communication A』 文英堂. [BL]

- Butler, K. D. (他). 1995. 『Living Encounter Oral Communication A』 秀文出版.
[LE]
Bowers, J. R. (他). 1995. 『Speak to the World Oral Communication A』 教育出版.
[SW]

5) 今回の調査においては、絶対数の少なさから非音声面の5つの要素を一つのカテゴリーとして分析した。なお、音声的要素である音調学に関しては、さらに「韻律」と「準言語」に分けることができ、その性格上韻律に含まれる要素(イントネーションなど)が英語教育で取り上げるべきものと思われるので、韻律、特にイントネーションに限って分析した。さらに挿し絵(自己紹介)に関するNVCにおいては、日本人が不得意であるとされる握手に限って分析した。

6) 分析結果は紙面の都合上以下のページを参照して頂くことで割愛させて頂きたい。

- 題材, 主題中の NVC に関して
『Lighthouse Conversation』 p85
『Sailing Oral Communication A』 p50
- 挿し絵中の NVC に関して(自己紹介)
『Active English Communication A』 p4
『Laurel Oral Communication A』 p8
『New Start English Communication A』 p6
『Echo English Course Oral Communication A』 p10, 11, 12
- 挿し絵中の NVC に関して(その他)
『Mainstream Oral Communication A』 p40, 58
『Evergreen Communication A』 p44
『Hello, There! Oral Communication A』 p11
『Expressways Oral Communication A』 p25
『Lighthouse Conversation』 p80
『Birdland Oral Communication A』 p13, 25, 39, 57, 77
『Speak to the World Oral Communication A』 p23
- 音声的 NVC に関するエクササイズ
『Sailing Oral Communication A』 p83, 87, 91
- 非音声的 NVC に関するエクササイズ
『Lighthouse Conversation』 p18, 51, 119
- 欄外, 付録中の音声的 NVC
『The New Age Dialog』 p3, 7, 15, 19, 27, 35, 45
『Active English Communication A』 p6, 57
『Evergreen Communication A』 見開き
『Hello, There! Oral Communication A』 p6, 8, 10, 12, 14, 26, 54
『Lighthouse Conversation』 p7, 11, 15, 19, 58
『Mainstream Oral Communication A』 p8
『Echo English Course Oral Communication A』 p61
『Speak to the World Oral Communication A』 p52, 56, 58, 60, 64, 66, 68, 70
- 欄外, 付録中の非音声的 NVC
『Mainstream Oral Communication A』 見開き
『Select Oral Communication A』 p103
『Hello, There! Oral Communication A』 p15, 25, 32
『Lighthouse Conversation』 p83
『Laurel Oral Communication A』 p31
『Sailing Oral Communication A』 見開き
『New Start English Communication A』 見開き
『Echo English Course Oral Communication A』 p34, 見開き(2)

【参考文献】

- Birdwhistell, R. L. 1970. *Kinesics and Context*. University of Pennsylvania.
- Broshnahan, L. 1988. *Japanese and English Gesture : Contrastive Nonverbal Communication*. Taishukan Publishing. (日本語訳：岡田妙, 斉藤紀代子. 1988. 『しぐさの比較文化』. 大修館書店.)
- Brown, H. D. 1987. *Principles of Language Learning and Teaching*. 2nd ed. Prentice Hall Regents.
- Brown, H. D. 1994. *Principles of Language Learning and Teaching*. 3rd ed. Prentice Hall Regents.
- Canale, M. 1983. From communicative competence to communicative language pedagogy. In Richards, J. C. & R. W. Shumidt. eds. 1983. *Language and Communication*. 2 -27.
- Canale, M. & M. Swain. 1980. Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*. 1/1. 1-47.
- Chastain, K. D. 1988. *Developing Second-Language Skills: Theory to Practice*. 3rd ed. Harcourt Brace Jovanovich.
- Condon, J. C. & F. S. Yousef. 1975. *An Introduction to Intercultural Communication*. Bobbs-Merill Education Publishing.
- Ekman, P., W. Friesen. & P. Ellsworth. 1972. *Emotion in the Human Face: Guidelines for Research and an integration of findings*. Pergamon.
- Ferraro, G. P. 1990. *The Cultural Dimension of International Business*. Prentice Hall. (日本語訳：江夏健一, 太田正孝監訳. IBI 国際ビジネス研究センター訳. 1992. 『一異文化マネジメント—国際ビジネスと文化人類学』. 同文館.)
- Ferraro, G. P. 1994. *The Cultural Dimension of International Business*. 2nd ed. Prentice Hall.
- Hall, E. T. 1959. *The Silent Language*. Doubleday.
- Hall, E. T. 1966. *The Hidden Dimention*. Doubleday.
- Hall, E. T. 1976. *Beyond Culture*. Doubleday.
- Hurley, D. S. 1992. Issues in teaching pragmatics, prosody, and non-verbal communication. *Applied Linguistics*, 13/3. 259-281.
- Kellerman, S. 1992. I see what you mean: The role of kinesic behavior in listening and implications for foreign and second language learning. *Applied Linguistics*, 13/3. 239-258.
- Mehrabian, A. 1968. Communication without words. *Psychology Today*, II. 9. 52-55.
- Mehrabian, A. 1972. *Nonverbal Communication*. Aldine Atherton.
- Morley, J. 1991. The pronunciation component in teaching English to speakers of other language. *TESOL Quarterly*. 25/3. 481 - 520.
- Leathers, D. G. 1986. *Successful Nonverbal Communication: Principles and Applications*. Macmillan Publishing Company.
- Leathers, D. G. 1992. *Successful Nonverbal Communication: Principles and Applications*. 2nd ed. Macmillan Publishing Company.
- Neu, J. 1990. Assessing the role of nonverbal communication in the acquisition of communicative competence in L2. In Scarcella, R. et al eds. 1990. *Developing Communicative Competence in a Second Language*. 121-138.
- Patterson, M. L. 1983. *Nonverbal Behavior: A Functional Perspective*. Spring-Verlag New York. (日本語訳：工藤力(監訳). 1995. 『非言語コミュニケーションの基礎理論』. 誠信書房.)
- Vargas, M. F. 1987. *Louder than Words: An Introduction to Nonverbal Communication*. Iowa State University Press. (日本語訳：石丸正. 1987. 『非言語コミュニケーション』. 新潮社.)
- Yokaichiya, T. 1989. Communication: Words, Voice and Actions. *TABARP*. (神戸女子大学) 5. 109 - 134.
- 伊東治巳. 1994. 「「コミュニケーション活動」とは」. 『英語教育』. 43/4. 8-10. 大修館書店.

- 伊藤雄二. 1995. 『教科書の利用』. 研究社.
- 垣田直巳(監修)三浦省五(編). 1983. 『英語の学習意欲』. 大修館書店.
- 杉本裕. 1989. 「英語教材についての調査研究IV — 英語IIA (英会話) を中心として —」. 『日本私学教育研究所紀要』. 23/2. 369 - 416.
- 田中正道. 1991. 『英語教材開発マニュアル』. 開隆堂.
- 中野道雄・ジェイムズ・カーカップ. 1985. 『日英比較 ボディ・ランゲージ事典』. 大修館書店.
- 橋本満弘・石井敏(編). 1993. 『コミュニケーション論入門』. コミュニケーション基本図書. 第1巻. 桐原書店.
- 橋本満弘・石井敏(編). 1993. 『日本人のコミュニケーション』. コミュニケーション基本図書. 第2巻. 桐原書店.
- 橋本満弘・石井敏(編). 1993. 『英語コミュニケーションの理論と実際』. コミュニケーション基本図書. 第3巻. 桐原書店.
- 深沢清治(他). 1992. 「異文化理解・異文化コミュニケーションを目指した英語教育」. 『英語教育』. 41/7/9月増刊号. 63-83.
- 古田暁(編). 1987. 『異文化コミュニケーション』 有斐閣.
- 平野絹枝. 1993. 「コミュニケーションにおける『態度』の指導と評価 — コミュニケーション方略を中心にして —」. 『現代英語教育』. 6月号. 12-15. 研究社.
- フォン・ラフラー=エンゲル, W. (編) 本名信行・井出祥子・谷林真理子(編訳). 1981. 『ノンバーバル・コミュニケーション』. 大修館書店.
- 本名信行. 1992. 「身振り言語と身体ことば」. 『言語』. 21/1. 81- 86. 大修館書店.
- 本名信行(他)(編). 1994. 『異文化とコミュニケーション 1 — ことばと文化』. 三修社.
- 町田善義. 1989. 「非言語コミュニケーション」. 『獨協大学外国語教育研究』. 8/3. 253 - 267.
- 文部省. 1989b. 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』. 教育出版.
- ロボ, F・津田葵・楠瀬淳三. 1984. 『英語コミュニケーション論』. 大修館書店.